

人生の目的



総長
大谷 実

卒業生の皆さん、この度のご卒業、誠におめでとうございます。永年のご苦勞が稔って、それぞれの修業課程を無事修了し、新たな人生行路の門出を迎えることができましたことに對し、心からお祝い申しあげます。

經濟の破綻に端を発する構造改革は、これまでに築き上げてきた豊かな社會の維持・發展のために是非とも実現すべきであります。政府を中心として社會全体が取り組んでいるにもかかわらず、その前途は依然として混沌とし、不透明であります。そうした中で、近頃、新聞や雑誌で、人間の「しあわせ」とか「幸福」という言葉が、やたらと目立つようになりました。

豊かさを求めて物質文明の發展に躍起となってきたこれまでの日本人の生き方に反省を加え、人權や心の問題つまり人間性に目を向ける傾向が社會で顯著になってきたことは、大変好ましいことであると考えます。特に、人間の「しあわせ」とか

「幸福」を見直そうとする昨今の動向は、注目すべきです。「古來、生きとし生ける者は――人間であれ、動物であれ、はたまた植物であれ、皆幸福を求めて生きる」と言われているように、幸福の追求こそ人間の究極の目標であり、その意味で「人生は、幸福を求めて歩む旅路である」と思います。

それでは、そもそも、「幸福」とは何でしょうか。国語辞典によりますと、幸福とは、「満ち足りて幸せだと感ずること」だとあります。そして、このような満足感、幸福感をいつも心に抱き、満ち足りた氣分で一生を歩むことができれば最高の人生です。幸福主義者は、人生の究極の目的は「幸福」であるといっていますし、日本の憲法十三条も、「幸福の追求」こそ基本的人權の究極の理念としているゆえんです。

では、私たちは、どういうときに「幸福」と感ずるのでしょうか。目標を達成したり、幸運に出くわしたときのように、幸福を感じる場合はいろいろあります。しかし、例えば、目標とする職業に就くことが出来ても、順調なコースを歩むことができるとは限りません。リストラに遭うかもしれませんし、病氣になって働けなくなるかもしれません。もちろん、不幸に陥らないように努力するのは人間として当然ですが、しかし、そうならない保証は誰にもないのです。そして、間違いなくやってくるのは、年老いて、やがて、生命の終わりを迎えるということ。つまり、富や、快樂、名声といった「この世の榮華」は、確かに一時的には幸福感を満たしてくれますが、しかし、それだけを人生の目的としていたのでは、やがて絶望し、不幸になるのは必定です。

そうすると、一番大切なことは、どんなに辛い災難・不運に見舞われても、また、不治の病に冒され余命幾ばくもない状態でも、希望を持って前向きに生きられるような、本当の意味での幸福をもたらしてくれる人生の目的を持つことではないか。

明治時代に北海道の開拓のために招聘され、札幌農学校の教頭として日本の教育界に大きな影響を与えたアメリカ人のウィリアム・クラーク博士は、帰国に際して、「Boys, be ambitious」と述べて青年たちを励ましたといわれています。この言葉は一般に「青年よ、大志を抱け」と訳されているのですが、しかし、クラーク博士は、それだけをいったのではありませんでした。「青年よ、大志を抱け。しかし、それは金銭や欲望のためではなく、また、いわゆる名声という空しいもののためであってはならない」と続け、そして「for attainment of all that a man ought to be」つまり、「人間として当然備えなければならぬ、あらゆることを成し遂げるために、大志を抱け」と申して、青年たちを激励したのです。

「人間として当然備えなければならぬものを備えられるように努力せよ」、これがクラーク博士の本当のメッセージだったのです。しかし、「人間として備えなければならないこと」とは何でしょうか。クラーク博士の弟子であった新渡戸稲造は、「それは『人格の完成』を人生の目的とせよということである」と述べています。人格の完成こそ、人間として目指すべき最高の目標であるとし、人格完成という至高至聖の芸術は、人間の一生のみでは完成しがたい大事業であり、その事業の完成のために「大志を抱け」とクラーク博士は励ましたのです。

確かに、金銭を得たり、快楽に耽り、名譽を与えられるのも、一時的には人を幸せにしてくれます。しかし、物欲的な豊かさには限界がありますし、何よりも、この世の幸せは移ろいやすく、気まぐれであります。幸せは「青い鳥」であり、掴まえたと思った瞬間に逃げてしまう類いのものだといわれるゆえんです。

クラーク博士は、そうした空中楼閣のような幸福では、結局人間は絶望に至るのが必定であり、至高至善の価値を目標にして、一步一步、希望を持って歩み続けることが真の幸福つまり至福に到達する道だと説いたのです。もちろん皆さんは、まだ若いのですし、これからいろいろな経験をされるのですから、物事を狭く考えずに、文字通り自由闊達に、「蛇のごとく聴く」この世を力強く逞しく生き抜いて欲しい。が、同時に、目標を高くして、善なるもの、聖なるものを目標として欲しいのです。

どんなにつらい災難、予期しない不遇・不運に出会っても、また、不治の病に冒され、余命幾ばくもない病状でも、なお、希望をもって生きられるような人生の目的、つまり人格の完成という大事業のために、私は、改めて、皆さんに「大志を抱け」というメッセージを贈りたいと思います。そして、やがて始まる現実の社会生活において、「人間として本来あるべき姿」、つまり人格の完成という人生の目標を確固としたものとして、不透明な二十一世紀を、逞しく、そして幸せに生き抜いてくださることをお祈りします。

自治自立の人民の養成



大学長
八田英二

今春、晴れて学士の学位をお受けになった卒業生の皆様、そして修士ならびに博士の学位を授与された大学院修了生の皆様に、同志社大学長として心からお祝い申し上げます。これまでの皆様の勉学努力、研究努力に対して深く敬意を表します。皆様の努力が名前の刻まれた学位記となって実を結びました。この間、皆様を温かく支え、見守ってこられたご家族をはじめ関係者の方々に衷心よりお祝い申し上げます。卒業生、修了生の皆様には、今日をあらしめていただいた多くの方々に對して感謝の念を新たにさせていただきたいと思ひます。

皆様が学ばれた同志社大学は、今日わが国屈指の総合大学に発展しております。優秀な教授陣、素晴らしい研究環境を提供し、教育事業の展開を通して社会に貢献することが本学の使命です。これまでに数十万人の有為な卒業生が大学を巣立ち、実社会のさまざまな分野で活躍しています。

同志社大学は米国から帰国した新島襄が創立した同志社英学校に源を発しています。創立は一八七五年十一月二十九日でした。新島襄による祈りとともに同志社は産声をあげました。生徒数はわずか八人でした。翌年には熊本バンドと呼ばれた献身の志をもった優秀な青年も加わり、同志社教育は次第に世の中に認知されるようになりました。同志社にとつて最初の卒業式は一八七九年六月十二日に挙行されております。場所は校内の第二寮階下の講堂と記録されております。午前十時から式は始まり、卒業生十五人に卒業証書が授与されました。後の同志社総長海老名弾正も卒業生の一員として参列しております。式では卒業生全員により記念演説が行われました。新島は送別の辞を述べ、つぎのように締めくくっております。

Go, go, go in peace. Be strong, Mysterious Hand guides you.

式は漸く午後五時に終了いたしました。

このような記念すべき第一回卒業式から数えて、本日は百二十四年目にあたります。新島の教育事業はこの間、綿々と受け継がれてまいりました。皆様学ばれた同志社大学は三つの教育理念を掲げております。自由主義、キリスト教主義、国際主義です。建学の精神のもと、本学は教育事業を通じて、わが国の近代社会の形成に大きく寄与してまいりました。そして今後とも、この役割をわが国の教育界で率先して果たしていかねばなりません。本学の教育事業に対する信念は「良心ノ全身

ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」という良心碑に込められています。時代を問わず、良心碑は同志社教育の原点です。

皆様が同志社大学、あるいは大学院に入学された折のことを思い出して下さい。その入学式で、「同志社大学設立の旨意」の朗読することにより、教職員一同は同志社大学の教育理念に従いつつ、教育指導に専念することを宣言いたしました。今年もまた、卒業生や修了生の数だけの、自ら立ち自ら治むるの精神を備えた人物、いわゆる自治自立の人民の養成を成し遂げることができました。教育事業の成果ともいうべき卒業生や修了生を送り出すことは、私たち教職員一同のこのうえのない誇りとするところでず。

皆様が人生の第一歩を踏み出す社会は、未曾有の転換期を迎えています。この時代に求められているのは、どのような状況でも、つねに自らの生き方を主体的に考える能力をもった人物です。高く理想を掲げ、主体的に問題解決にあたる創造力溢れる人物の育成は同志社大学の教育目的とするところでず。皆様が本学で身につけられた学術技芸の知識、ここで涵養された独立独行の精神を発揮され、二十一世紀の社会を率先して切り開かれることを心から願っています。

一八六四年、新島襄は江戸から函館に向かいました。そこで上海に向かうベルリン号の乗船に成功し、脱国を果たしました。上海からはワイルド・ローバー号に移り、一路ボストンを目指し、脱国から一年あまりをかけて、漸く米国に上陸しました。新島がキリスト教主義大学の設立という計画を胸に帰国したのは一八七四年、この間十一年の歳月が流れました。

生涯、新島は多くの詩歌を創りました。皆様の門出にあたり、その中から三首をご披露したいと思います。

第一句は江戸から函館への船中で、脱国を前に立身出世の夢を胸に刻みながら詠んだものです。

「武士ちのふの思ひ立田の山紅葉 錦きざればなど帰るべき」

第二句は大志を抱き、米国から帰国した折に詠んだものです。

「故郷に飾る錦は匣はこの中 身に纏まとうべき時にあらねば」

立身出世という昔の夢は捨てさり、今は錦の衣を着るべきときではなく、教育という大事業を前に、そんな物は箱の中にしまっておくという決意を新たにしたものです。

第三句は天国に召された年、一八九〇年の元旦、大磯の旅館で療養中に「尚壮図を抱いてこの春を迎う」という漢詩とともに詠んだものです。

「いしかねも透とおれかして一筋に 射る矢にこむるますらをの意地」

病床にあつても新島の烈々たる気概が見えてくるようです。

これから社会に船出される皆様は、私たちの誇るべき新島襄の弟子です。ここ同志社大学で培われた「学ぶ心」と「新島精神」を見失わず、これからも弛まず自己研鑽に励まれることを願って止みません。

最後に、学部卒業生ならびに大学院修了生の皆様一人ひとりの行く末に大いなる期待を寄せて、私の贈る言葉といたします。

実りの時を迎えて


 女子大学長
森田潤司

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

皆さんは全国六百六十校余りある大学の中で、まぎれもない同志社女子大学の学生として卒業されます。同志社女子大学独自の学風の中で醸成された精神と果実を得て卒業されるわけです。その精神とは創立者新島の願いであり、祈りです。新島は学生たちにキリスト教の教えに基づく愛と平等の心を身につけた人物となることを願いました。この願いは時代を超えて連綿と引き継がれてきました。

マルコによる福音書四章二六節―二九節に「成長する種」の例えがでています。「また、イエスは言われた、『神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、

その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである』」

皆さんが、蒔いた学修・学問の種は、同志社女子大学という土のなかで今や豊かな実りの時を迎えました。成熟した豊かな実があります。その実にはキリスト教の精神に基づく愛と平等の心が詰まっています。この実を刈り取り、皆さんの大きな夢と高い志を実現する糧としていただきたいと思います。見方を変えて皆さん自身が「成長する種」だとすることもできます。皆さんが同志社女子大学という土のなかで大きく成長され今や豊かな実りの時を迎えられたといえます。これからの社会でのごことに不安をお持ちの方もあると思いますが、皆さんには自然に力がついているわけで、そのことを信じて活動していただければ間違いありません。

今、世界に目を向けると、災害や戦禍に巻き込まれたり、貧困や飢えに苦しんだりしている人々も大勢います。従来、こうした問題は、一個人、一地域、あるいはせいぜい一国の問題として捉えられ、そういう単位における責任として解決することが求められました。しかし、今や、あらゆる問題は地球規模の問題となってきました。世界のどこかで戦争や災害が起これば、世界中の国や人々の食糧問題やエネルギー問題となつて関係してきます。逆に、一国の政策や私たち一個人の何気ない生活行動が、戦争や災害や地球環境破壊など地球規模の問題を間接的に引き起こしている場合もあります。世界の諸問題は互いに関係しており、私たちの生活と無縁ではありません。

戦争について、国際連合教育科学文化機関憲章いわゆるユネスコ憲章の前文は、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことが、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった」と述べています。さらに続けて「平和は、失われないために、人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない」と述べています。人は戦争を始めとする非道さに立ち向かうために、心の中に「平和のとりで」を築かねばならないと言っています。「心の中の平和のとりで」とは「良心のとりで」と言うこともできましょう。新島は愛と平等の精神による教育を説き、「二国を維持するのは、決して二、三の英雄の力ではなく、一国の良心とも言ふべき人たちである」と説きました。新島が今生きておれば、平和と安全のために、「良心を手腕に運用する人物」が国を超えて「世界の良心のとりで」を築き、「人類の知的及び精神的連帯」を図らなければならないと言うのではないでしょう。

世界には戦争や紛争の他、人口問題を始め、難病、食糧問題、エネルギー問題、地球環境問題といった地球規模の問題が山積しています。これらの問題の対処に際しても、相互の風習と生活を知らずに迂闊な対処をすれば新たな衝突や新たな問題を産む危険があります。地球規模の問題の解決には調和重視の思想が重要で、新島の説く「良心を手腕に運用する人物」こそが、これを解決できると考えます。本学で学んだ皆さんが、世界の

人々と相互理解をし、「世界の良心のとりで」を築き、知的及び精神的に連帯して、明るい希望の見える世界を築いてくれることを心から期待しています。

ところで、皆さんは、今後も、世界のどこにいても、本学と繋がっていることを忘れないで下さい。本学のエンブレムには栄光館とぶどうの蔓、ぶどうの房とともに、ヨハネによる福音書にあるイエスのことば「わたしはまことのぶどうの木」という意味のラテン語「Ego Sum Vitis Vera!」ということばが描かれています。これは本学と在学生や卒業生の関係は枝と枝、蔓と蔓の繋がりのような関係であること、また、創立者新島を通して、さらにイエスキリストを通して、偉大なる神とも繋がっていることを表しています。その繋がりの故に、何かで行き詰まったときにも、悩みのときにもきつと大いなる導きがあることを信じていただきたいと思います。一方で、根と枝や葉、あるいは枝と枝は相互の関係にあります。それぞれの枝に付いている葉がエネルギー源となるデンプンを作り出し、より大きな枝や幹や根に送り戻してくれることで、根は水や栄養分を吸収する力を得、幹や枝や葉に水や栄養分を送り込む力を得ます。幹や枝や葉で栄養分からいろいろな成分が合成され、ぶどうの木は、成長していきます。新しい枝をのばし、多くの葉をつけ、より多くの実を結ぶようになるのです。同じように、皆さんが卒業生の活躍が本学や私たち教職員の力となるのです。別の枝である他の卒業生の力ともなるのです。

どうぞ健康に留意されて活躍してください。皆さんのこれらの人生が幸せであることを心から祈念いたします。